

シリーズ最終回

# 「地域の福祉力 最前線」

— 地域のこれからをみんなで描く計画づくり —

地域での「生活のしづらさ」に気づき、共感し、  
みんなで取り組む力－地域の福祉力－に  
注目するシリーズ。

県内の地域福祉の“いま”をお伝えします。

これまで、地域で語り合う「出会いの場」、サロンや見守りなどの活動をすすめる「協働の場」、地域の生活課題について知恵を出し合う「協働の場」についてご紹介してきました。住民主体ですすめられる活動には、地域のニーズや担い手の後継など、さまざまな変化が起こります。変化に対応する活き活きとした地域でありつづけるために、住民自身が地域の姿を描く「計画づくり」が始まっています。

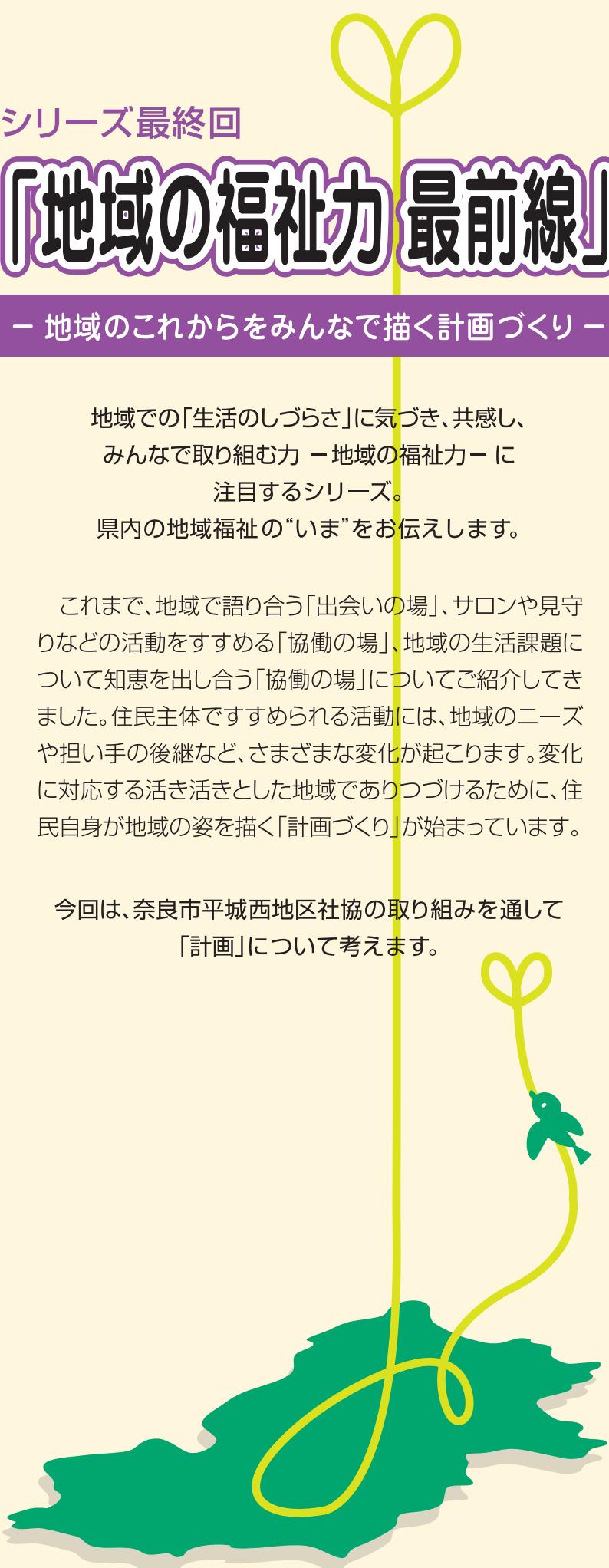
今回は、奈良市平城西地区社協の取り組みを通して  
「計画」について考えます。

地域が歩む道のりは、  
地域みんなで考える



地域に暮らす住民自身がこれからの地域の姿を描く小地域単位の計画(小地域福祉活動計画や地区福祉活動計画などと呼ばれる)をつくる地域が増え始めています。

計画というと少し堅苦しく思われるかもしれません、自分たちの地域のことを自分たちで考える面白さが詰まっているようです。



## 地域の今に向き合う

平城西地区社会福祉協議会(以下、「平城西地区社協」という)は、昭和40年代開発の前期ニュータウンが広がる平城西小学校校区において、地域住民が参画して地域福祉を推進する組織である。昭和60年の地区社協設立以来、地域住民の手によって1つ1つ活動を広げてきた。

60歳代を中心(当時)のこの地域は、急速な高齢化という現実に向き合い、これから地域の方向性を考える転換期に来ていた。高齢者のふれあいや子育て支援などに広がった活動を次の世代にどのように継承していくか、模索し始めていた平成16年、この地区社協に「計画をつくってみませんか」と声がかかった。

平城西地区社協の伊藤会長によると、「子ども」「高齢」「障がい」「一般」の4つの部門で、進められた話し合いは足かけ2年、10数回にわたった。これまでの活動を4つのテーマごとに整理・分析していくと、高齢化の問題だけでなく、「子どもたちを地域で育っていくためにはどうしたらいいだろう」「働く世代や退職後の住民にもつながりが必要じゃないか」「障がい分野にも取り組んでいかねば」、話し合うごとに気づきが生まれてきた。はじめは計画とは何かもわからず参加したメンバーも、回を重ねるごとに「この問題は、どうにかしなれば!」と真剣な議論に引き込まれていく姿が印象的だったという。



平城西地区社協／伊藤会長



活動の「バイブル」  
21年度末には  
見直しを行った

## 地域福祉活動の醍醐味

計画づくりを通しての気づきは、地域の福祉を自分でつくっていこうという原動力となり、例えば「高齢者だけでなく退職後の世代にもつながりを」とシニアサロンを企画。地域活動への入口としても期待をかけている。

また、高齢部門では、より日常的な見守り・支え合い活動の取り組みが始まった。住民アンケートを実施すると「緊急時が不安」「ゴミ出しが大変になった」「声かけや話し相手がほしい」などの困りごとがある一方で、「ちょっとした手助けならできる」と申し出てくれた人も大勢いた。日々の暮らしの中での向こう三軒両隣の支え合いに発展させていきたいという。

計画を経て、この地域は「自分たちの気づきから新たな活動を生み出す」という地域福祉の醍醐味あふれる段階に入ったといえる。これは、みんなで目標を共有することが、幅広い住民の参加や協力、活動の活性化につながるという計画ならではのメリットの現れでもある。

## つないでいくバトンとして

伊藤会長は、自分たちの手で作り上げた地区福祉活動計画を大切そうに「バイブル」と呼ぶ。住民がていねいに作り上げた計画には、これから地域の姿がしっかりと描かれ、これから補強すべき活動も明らかにされている。これを携えて活動を進めていけばよいのだという確信がそこにある。

地域はいつも変化をしており、「新たな担い手にバトンタッチすることを意識している」と伊藤会長は言う。「固定化を避け多くの参加や協力を得ていくこと」と同時に、「担い手が変わっても同じ方向を向いて活動の目的を共有していくこと」を大切にしたい地域みんなで作り上げた「計画」は、そんな「継承のバトン」なのかもしれない。

計画づくりの支援にあたる奈良市社協の越智主任によると、「つくってよかった!」という声が多い。その理由は「自分たちのまちの現状をしっかりと確認できた」ことが大きいようだ。地域の課題に向き合い、未来を考え、活動を豊かにしていく、そんな地域づくりを今後も支援していきたいという。

奈良市社協  
地域福祉推進係／越智主任



平城西地区社協 会議のようす

県内には、10年を経過し成熟期を迎えた活動組織が多くあり、充実した取り組みを行なう一方で、地域の変化への対応や担い手の確保などの課題も抱えている。「地域のこれからを地域みんなで考える」計画づくりは、その有効策の1つではないだろうか。

